

虐待を生む親子関係における 子どもの生き様

西南学院大学教授
小林隆児
こばやしりゅうじ

はじめに

子ども「虐待」という用語は、一方的に親を責めるニュアンスを含むため、まるで「虐待」は親の育て方によるものだとする短絡的思考を生みやすい。それとはまったく逆の意味で、「発達障害」は子ども自身の脳の生得的な障壁に起因するものだとする仮説が堂々とまかり通り、「虐待」と「発達障害」は原因を異にするものだと思われやすい。

昨年二月、筆者が小書『関係』からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』（ミネルヴァ書房）（以下「関係からみるAS」）をまとめて痛感したのは、他所

で発達障害と診断された乳幼児を「関係」から改めて見直すと、「虐待」が絡んでいることを推測させる事例が少なくないことである。これらの事例を詳細に検討すると、なぜ「虐待」（と呼ばれる事態）が生じたり、「発達障害」（とみなされる病態）が生まれたりするのか、その成り立ちが見えてくる。

そこで本稿では、筆者が実施した新奇場面法（以下SSP：アタッチメント行動の特性を評価するために行う心理学的実験の枠組み。母子の分離と再会によって引き起こされる不安に子どもがどのように対処するかを観察する方法）のデータから、虐待が絡む事例を取り上げ子どもの生き様を提示してみよう。

具体的な事例から

●二歳〇カ月 男児（関係からみるAS「1」事例九より）

言葉が出ない、やり取り遊びができないことを心配しての両親同伴での受診。姉に手がかかり、この子はおとなしいこともあってひとりにさせることが多かった。名前を呼んでも振り向かない、頭を床にくっつける、立ったままくるくる回る、CDを取り出し、指でくるくる回す、鉛筆でなぐり書きをするなど、気になる行動がつきつきに出現したための受診である。

初診時にSSPを実施。母親はスタッフから勧められた椅子に座っているだけで、子どもに声を掛けることもなく、一緒に遊ぼうともしない。あまりにも異様な光景で、日頃の家庭での養育はネグレクトを強く推測させたが、父親の発言でも追認できた。以下SSPの特徴である。

母子ともに相手に働きかける言動は見られない。母子のあいだに息詰まるような空気が生まれている。ストレンジジャー（以下ST）と母子二人で過ごしているも張り詰めた空気は変わらないが、母親が退室した途

端にSTが子どもにさり気なく働きかけると、子どもはそれに応じ始める。STの差し出す玩具にも興味を示して、遠慮がちだが手に取る。しかし、STと入れ替わって母親が戻ってくると、部屋を出て行くSTの後ろ姿を名残惜しそうに目で追いつける。再びふたりになると、途端に先ほどの張り詰めた空気に戻り、子どもの動きも凍り付く。再び母親が部屋を出て行き、ひとりぼっちになると、子どもは黙々とボードにグルグルとなぐり書きを繰り返すようになる。ひとりぼっちになった心細さや不安、緊張を子どもなりに和らげようとする試みであることが見えてくる。

全体の流れを表面的に眺めていると、子どもは母親を無視するようにしてひとり遊びに興じているように見えるが、母親が退室してSTとふたりになったときと、ひとりぼっちになったときの変化を対比しながら見ていくと、子どもの母親に対する強い回避的態度は「拗ねている」と言つてよい。母親は子どものそうした「甘え」を感じ応じることが困難なため、子どもも母親にどう振る舞ったらよいかわからない。ひとりぼっちになったことによる不安と緊張の高まりを、子どもなりに一時的にでも和らげようとしてボードにグル

グルとなくなり書きする行動をとっているのがわかる。

●二歳九カ月 男児（関係からみるAS）（事例 二二より）

頭突き、衝動的行動などを主訴に祖母と母子三人での受診。満期出産。陣痛開始は早かったが、分娩に時間がかかり鉗子分娩で出産。仮死状態で傷だらけだったというが、母親は子どもをじかに見ていない。特に発達に気になることはなかったが、一歳五カ月、てんかんを発症。通院中の病院で二歳半のときに自閉症といわれた。以来、母親は気分が落ち込み、うつ病として他院で治療中である。子どもと付き合っていると、どうかかなりそうで、叩きたくなる。子どもは母親が嫌がることを好んでやるので、母親のイライラは募るばかりだという。以下SSPでの特徴である。

子どもは見るからに面白くなさそうに動き回っている。子どもは椅子に座っている母親にさりげなく近づき、背を向けて寄りかかるが、母親は戸惑っている。そうかと思うと、急にドアに背を向けながら後頭部をドアに打ち付ける。母親は「痛いよ」と注意をするが、ことさら注意されることをねらってやったようにみえる。

二七より）

食事をひとりで食べることができない、集団の中できちんとした行動がとれないとの相談で受診。妊娠三五週で出産。難産で仮死状態での出生。身体運動能力はキャッチアップし、二歳までは順調に経過。二歳一カ月のとき、療育センターで自閉症と診断され、その後両親同伴での受診となった。母親が食事や排泄をしつけようとすると嫌がり、手に負えない。その一方でいくつもの習い事に通わせている。

気持ちと裏腹なことをする。集団の中で落ち着かない。外出するとテンションが上がりつ放しで落ち着かない。語りかけるとオウム返しをする。難しいことはすぐに覚えるのに簡単なことができない。父の話によれば、母親は子どもが自分の言うことを聞かないと常々訴える。子どもが自分の思うようにならないと、母親は大きな声で当たり散らし、軽い暴力を振るう。子どもは怖がっているのではないかという。以下SSPでの特徴である。

ふたりで自由に遊んでいるとき、母親の声掛けにまったく応答することなく、背を向けて黙々と遊んでいる。見るからに拗ねているように見える。しかし、誰

る。STが入室して母親の前に座ると、子どもはすぐ近寄って背を向けて寄りかかる。あからさまにSTに甘えて見せて母親に当てつけている。母親が退室しても特に反応することなく、子どもはSTの手を引いて動き始める。しかし、相変わらず無気力で気の向くままに動いているだけで、楽しい雰囲気は生まれえない。再び母親がドアを開けて入室しそうになると、すぐに気づいてドアに駆け寄る。しかし、母親が入ってくる、母親を避けてドアに直接ぶつかると両手で当てる。その後も相変わらずの動きで、母親が退室しても何事もないかのような態度で、ひとりで過ごす。STが入室しても変わりなく、代わって母親が入室しても母親に目を向けることなく、ひとりで遊び続ける。

初診時の病歴聴取で虐待が強く疑われた事例である。母親の前で思わせぶりに甘えて見せるかと思うと、見知らぬ女性に甘えては当てつける態度を取る。そうかと思うとわざとらしく頭をドアに打ち付けて母親に心配させて関心を引こうとする。あの手この手を使って母親の関心を繋ぎ止めようと必死な様子が見える。

●三歳〇カ月 男児（関係からみるAS）（事例

かに相手をしてもらいたいという気持ちはとても強く、STが入った途端に、自分から積極的に関わろうとする。ただ、それがあまりにも一方的で、なんとか相手をしようとするSTではあるが、気分が高揚してはしゃぐ子どもについていけず、困惑気味である。母親との分離と再会時には、一見何もなかったかのように振る舞っているが、それでもひとりきりになったときにため息をつき、心細さからくる不安と緊張の高さがうかがわれる。STとの再会場面になると、つい先ほどまで心細い体験をしていたにもかかわらず、何もなかったかのように平然とSTに自分から先ほどと同じように関わる。子どもの一方的な関わりが印象的である。そこでの子どもの気分の高揚感はやや躁状態と言っても良い。

なぜ子どもがSTに対してこのように一方的に関わるのか。母親の子どもへの関わりを見ることによつてその理由が見えてくる。母親は子どもの遊びの流れにまったく関係なく唐突に働きかける。夢中になって遊ぼうとする子どもに、STの存在を意識してか、突然自分の名前を言わせようとする。母親は常に何かにとられ、子どもの思いに沿って関わることができない。

子どもから見れば、母親の働きかけは予測しがたいが、母親を無視して自分独自の世界を作ることでもしか自分を保つことは難しいことが推測される。

虐待を生む親子関係における

子どもの生き様

生まれて間もない時期に、母子間にボタンの掛け違いが起こり、関係の困難が生じると、母子双方にとつてつきつきにつらいことが押し寄せられる。子どもはなんとか母親の関心を繋ぎ止めようとして、あらゆる行動に打って出る。おとなしくひとりで気持ちをとおさめようとすることもあろうが、時には母親の嫌がることで自分への関心を引き寄せようとする。そのような子どもは必死の試みは、母親から見れば手がかりイライラを募らせるものに映り、母親の怒りを引き起こす。こうして母子関係は負の循環を生む。すると子どもはより一層激しい行動で気を引こうとするが、そんな行動が日常化すると「発達障害」というラベルが貼られることになる。その一方で母親の怒りも歯止めをなくし、結果的に「虐待」という事態が生まれることになる。

おわりに

「虐待」と称して親を責め、「発達障害」と称して子どもの脳ばかりを問題にする。そのような混沌とした状況は、乳幼児期早期に親子のあいだで何が起きているか、その内実が知られていないことから生まれるものである。乳幼児期健診を含め、親子の「関係」をもっと丁寧にみていくことによつて、養育者の子育ての大変さはもちろんのこと、子ども自身も大変な思いをしながら生きながらえようとしていることがわかる。われわれは親子のどちらか一方に原因を求めるような短絡的な思考から脱却しなければならぬ。

〔文獻〕

- (1) 小林隆児「関係」からみる乳幼児期の自閉症スベクトラム——「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて」ミネルヴァ書房、二〇一四

虐待が子どもに引き起こすもの

虐待を受けた子どもにも見られる 他者イメージの不全と 対人関係の障害

青木 豊
あおき 豊
あおき 豊

はじめに

子どもも大人も、他者に対する表象・認知・イメージ（これらを学問的には異議があるかもしれないが以降イメージと記述する）を持つ。特定の他者に対するイメージ形成は、個人の過去の体験にも影響を受ける。被虐待体験は、他者および自己イメージに大きな歪みやバイアスを生むと考えられており、その歪み・バイアスが対人関係の問題や障害を生む一つの要因となる。本論では、1. 虐待が他者表象・認知・イメージに与える影響、2. 対人関係の障害と他者イメージ、3. 他者イメージが対人関係を歪めますメカニズム、の順に、

アタッチメント研究、トラウマ研究、精神分析的観点、虐待研究、著者の臨床経験をもとにしてまとめる。

1 虐待が他者表象・認知・イメージに与える影響

虐待は、子どものところに特徴のある歪み・問題を生む。一つはアタッチメントの問題であり、二つめがトラウマ（心的外傷）の問題である⁽¹⁾。他にも非特異的な種々の困難が生じる。本論では他者イメージについて研究が進んでいるアタッチメントの問題という側面と心的外傷後ストレス障害の研究に主に焦点を当てて述べる。